様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１２６１２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２１９０

研究課題名（和文）カントの批判哲学とバウムガルテンの「学問基礎論としての形而上学」との対決

研究課題名（英文）The Confrontation between Kant's Critical Philosophy and Baumgarten's Metaphysics as the Foundation of Science

研究代表者
増山　浩人（Masuyama, Hiroto）

電気通信大学・情報理工学域・准教授

研究者番号：３０７３３３３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題はカントがバウムガルテンの形而上学とどのように対決しているのかを明らかにした。バウムガルテンは形而上学を他の諸学の基礎概念・基礎原則を定義する学と定義した。カントはこの定義を形而上学と他の諸学の境界を消してしまっているという理由で批判した。さらに、カントは存在者の述語、つまりカテゴリーから魂、世界、神の概念の導出を試みるバウムガルテンの手法も否定した。以上の問題点を解決するために、カントは純粋悟性概念としてのカテゴリーと純粋理性概念としての魂、世界、神の概念を区別したのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『純粋理性批判』におけるカントのカテゴリー論、理念論、形而上学方法論は従来バラバラに考察されがちであった。これら三つの議論をバウムガルテンの「学問基礎論としての形而上学」に対するカントの応答として統一的に再構成した点に本研究の学術的意義がある。さらに、本研究は「なぜ17世紀以降に世界論と心理学が形而上学に組み入れられたのか」という形而上学史上の難問にバウムガルテン研究とカント研究を通じて答えを与えることができた。この発見は、古代から現代までの形而上学史を再検討する新たな手がかりとなる点で、社会的意義を有していると言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：This research project shows how Kant confronted Baumgarten’s metaphysics. While Baumgarten defined metaphysics as a science that defines basic concepts and principles of other sciences, Kant criticized this definition for dissolving the boundary between metaphysics and other sciences. Furthermore, Kant rejected Baumgarten’s method that attempts to derive concepts of the soul, the world, and God from predicates of beings, i.e., categories. To solve these problems, he distinguished categories as concepts of pure understanding from the concepts of the soul, the world, and God as concepts of pure reason.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：カント　バウムガルテン　ヴォルフ　ヴォルフ学派　形而上学　存在論　世界論　因果論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

18 世紀ドイツの哲学者 I.カント（1724-1804）は、自らの批判哲学によって、当時の合理論と経験論双方の問題を解決しようとした。にもかかわらず、従来のカント哲学の形成史的研究は、ロック、バークリ、ヒュームなどの経験主義者からの影響を強調する傾向があった。

この傾向を是正するために、近年、18 世紀ドイツの合理主義者であるヴォルフ学派、特に A. G. バウムガルテン（1714-1762）に関する研究が急速に進められている。カントはバウムガルテンの『形而上学』を教科書とした講義を行ってきた。さらに、カントが保有していた同書の第三版、第四版には多くの直筆の書き込みが残されている。この点に着目した研究者達は、バウムガルテンの『形而上学』と同書に対するカントの言及を比較することで、カントが同時代のドイツの合理主義者とどのように対決したかを様々な角度から明らかにしてきた。これらの研究の筆頭としては、C. Schwaiger, *Baumgarten*（2011）や C. D. Fugate; J. Hymers(eds.), *Baumgarten and Kant on Metaphysics*（2018）などが挙げられる。

しかし、これらの研究は、バウムガルテンが形而上学をどのように定義したのかという問題にほとんど注目してこなかった。これに対し、本研究は、この問題に取り組むことを出発点として、バウムガルテン形而上学の全体像を解明しつつ、カントがバウムガルテン形而上学とどのように対決していたのかを再検討した。

２．研究の目的

本研究の目的は、カントの批判哲学がバウムガルテンの「学問基礎論としての形而上学」とどのように対決したかを明らかにすることであった。

３．研究の方法

方法（1）バウムガルテンの形而上学定義に対するカントの批判の検討

著書『形而上学』において、バウムガルテンは形而上学を「人間的認識における第一諸原理に関する学」と定義している。しかし、この定義に関するさらなる解説は同書では行われていない。そこで、本研究では、バウムガルテンの弟子 G. F. マイアーの四巻本の解説書『形而上学』（1755-1759）と死後出版されたバウムガルテン自身の著作『哲学的百科事典の素描』（1769）と『一般哲学』（1770）を注釈として用い、この定義の内実の解明を試みた。

他方で、『純粋理性批判』（第一版 1781、第二版 1787）の「超越論的方法論」のみならず、形而上学の講義録においても、カントはバウムガルテンの形而上学定義に批判を向けている。本研究では、これらの批判を検討することで、バウムガルテンとカントの形而上学定義の相違点を解明することを試みた。

方法（2）バウムガルテンの世界論の基礎づけに対するカントの批判の検討

まず、『形而上学』に依拠して、バウムガルテンが世界論という学問をどのように基礎づけているかを検討した。その上で、主に『純粋理性批判』の「分析論」と「弁証論」の記述に依拠して、カントがバウムガルテンの世界論の基礎づけをどのように批判しているのかを明らかにした。

方法（3）バウムガルテンの予定調和説に対するカントの批判の検討

バウムガルテンはライプニッツ的な予定調和説を擁護したことで知られている。本研究では、カントが彼の予定調和説を批判することで、彼の世界論とどのように対決していたのかを明らかにした。

方法（4）ヴォルフ学派の基本用語の分析

ヴォルフ学派は「理由」、「原理」、「選言判断」などの用語を独自の意味で使用している。本研究では、ヴォルフや彼の支持者の原典にさかのぼって、これらの用語の意味を確定することで、方法①～③による研究成果の補強を図った。

4. 研究成果

上記四つの方法に対応する形で、本研究は以下の四つの成果を得ることができた。

成果（1）バウムガルテンの形而上学定義に対するカントの批判を検討した成果

まず、「人間的認識における第一諸原理に関する学」というバウムガルテンの形而上学定義における「人間的認識」が諸学問を、「第一諸原理」が諸学問で使用される基礎概念・基礎原則を指すことをつきとめた。このことを通じて、本研究はバウムガルテンが形而上学、すなわち存在論、世界論、心理学、自然神学という四つの学を「形而上学以外の諸学を基礎づける学」として定義していたことを明らかにした。

他方、カントは、この定義に依拠する限り、形而上学に属する学とそうでない学の境界があいまいになってしまうことを一貫して批判していた。実際、『形而上学』において、バウムガルテンは存在論、世界論、心理学、自然神学のみが形而上学に属する理由を述べていない。さらに、『哲学的百科事典の素描』で、バウムガルテンはそれ以外の全ての学も形而上学になりうることをほのめかしている。この点から、本研究はカントのバウムガルテン批判に一定の正当性があることを裏付けた。

以上の成果を「カントのバウムガルテン形而上学との対決――「超自然学」としての形而上学の復権」というタイトルで日本哲学会第 77 回大会で発表した。さらに、報告者がオーガナイザーを務めた日本哲学会第 80 回大会公募ワークショップ「バウムガルテンによる諸学の基礎づけ――形而上学から美学へ」もこの成果の一部として位置付けられる。同ワークショップでは、報告者と津田栞里氏（一橋大学）、井奥陽子氏（東京藝術大学）、桑原俊介氏（上智大学）の計 4 名が、①存在論、世界論、心理学、自然神学という形而上学の四部門間での基礎づけ関係、②形而上学全体と美学との間の基礎づけ関係、という二つの基礎づけ関係の具体像をそれぞれ異なる角度から発表した。

成果（2）バウムガルテンの世界論の基礎づけに対するカントの批判を検討した成果

まず、バウムガルテンが①「存在者の内的選言的述語」＝カテゴリーによる世界概念の定義、②この世界を経験できるという事実に基づく世界概念の正当化、というプロセスで世界論の基礎づけを行っていることを明らかにした。さらに、このプロセスを経て、彼が世界概念を存在者という「最高類」とこの世界という「個体」の間にある「種」概念として位置付けたことも明らかにした。

続けて、カントが悟性由来のカテゴリーと理性由来の理念を区別することで、バウムガルテンの世界概念の基礎づけを否定したことを明らかにした。まず、カントはカテゴリーの超越論的使用は不可能であると主張した。このことによって、カントは上記①を否定した。さらに、カントは世界概念を仮言的理性推理の形式から導出可能な理念として位置付けた。このことによって、カントはバウムガルテンとは異なる仕方で世界概念の導出と正当化を行ったのである。

以上の成果に関する論文は 2022 年 2 月に報告者が編者の一人を務める共編著の一部として出版社に提出した。その後の手続きが順調に進めば、2023 年前半頃に同編著は出版される予定である。

成果（3）バウムガルテンの予定調和説に対するカントの批判を検討した成果

1770 年の『就職論文』において、カントは「個別的に確立された調和」と「一般的に確立された調和」という対概念を使用していた。「個別的に確立された調和」とは、世界の諸実体の状態をその都度神が決定することでこれらの諸実体が一つの全体をなす事態を、「一般的に確立された調和」とは神によっ

て創造・維持された諸実体が力学的に影響しあうことで、これらの諸実体が一つの全体をなす事態を指す。本研究では、①カントがバウムガルテンの予定調和説を「個別的に確立された調和」という誤った前提にもとづく議論だと指摘したこと、②カントが「一般的に確立された調和」に基づく新たな世界論を確立したこと、の二点を明らかにした。

以上の成果に関する論文「カントのライプニッツ哲学受容の源泉としてのバウムガルテンの『形而上学』――前批判期カントの予定調和説批判」は日本ライプニッツ協会（編）『ライプニッツ研究』第 5 号（2018 年）に掲載され、同協会第 7 回研究奨励賞を受賞した。

成果（4）ヴォルフ学派の基本用語を分析した成果

まず本研究では、ヴォルフ学派の選言判断論の考察を行った。その結果、ヴォルフ学派と批判期カントの選言判断の定義が異なることが判明した。その上で、選言判断の形式から相互性のカテゴリーを導出する『純粋理性批判』の議論がこの批判期カント独自の選言判断の定義に支えられていることを明らかにした。この成果に関する論文「世界への接近――カントにおける相互性のカテゴリーの役割」は日本ヘーゲル学会（編）「ヘーゲル哲学研究」第 26 号（2020 年）に寄稿した。

さらに、本研究ではヴォルフの『存在論』の「充足理由律について」節と「諸原因について」節の分析を行った。その結果、①「原理」とは「他の理由を含むもの」であること、②「原理」は他の存在者の可能性の理由を含む「存在原理」、他の存在者の現実性の理由を含む「生成原理」＝「原因」、他の命題が真であることを認識するための理由を含む「認識原理」の三種類に区分されること、の二点を突き止めた。さらに、このことから、バウムガルテンの形而上学定義における「第一諸原理」が「認識原理」の意味で使用されていることを裏付けた。以上の成果に関する論文「ヴォルフにおける「理由」と「原因」の区別について――『存在論』における原因概念の二義性をてがかりにして」は『モナドから現存在へ――酒井潔教授退職記念献呈論集』（2022 年、工作舎）に寄稿した。

（付記）

2020 年初旬より新型コロナウィルス感染症の拡大を受け、国内・国外の研究者との交流が制限された。さらに、オンライン授業の準備・運営のために、2020 年度、2021 年度の研究時間は大幅に減少してしまった。そのため、本研究事業期間終了までに、方法①に記したカント独自の形而上学定義の検討は最低限しか行うことができなかった。それに加え、成果①に関しては、学会での口頭発表を行ったのみで、論文を投稿することはできなかった。こうした積み残した課題については 2022 年以降に取り組み、その成果論文を適切な媒体に公表したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 増山浩人	４．巻 26
２．論文標題 世界への接近　――カントにおける相互性のカテゴリーの役割――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『ヘーゲル哲学研究』（日本ヘーゲル学会）	６．最初と最後の頁 86-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増山浩人	４．巻 5
２．論文標題 カントのライプニッツ哲学受容の源泉としてのバウムガルテンの『形而上学』　―前批判期カントの予定調和説批判―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『ライプニッツ研究』（日本ライプニッツ協会）	６．最初と最後の頁 200-218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 増山浩人	４．巻 25
２．論文標題 『カントの世界論』を読み直す　―三重野・佐藤・檜垣に対する応答―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『モラリア』（東北大学倫理学研究会）	６．最初と最後の頁 40-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ヴォルフガング・エアトル（著）、増山浩人（訳）	４．巻 1135
２．論文標題 「表象にほかならないということ」　―心の外へと向かうためのスアレス的方法？ー	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『思想』（岩波書店）	６．最初と最後の頁 94-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 増山浩人
2．発表標題 バウムガルテンによる世界論の基礎づけ――世界概念の起源と正当性の証明
3．学会等名 日本哲学会第80回大会公募ワークショップ「バウムガルテンによる諸学の基礎づけ――形而上学から美学へ」
4．発表年 2021年

1．発表者名 増山浩人
2．発表標題 ヴォルフにおける「理由」と「原因」の区別について
3．学会等名 日本ライプニッツ協会第12回研究大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 増山浩人
2．発表標題 世界への接近　―カントにおける相互性のカテゴリーの役割―
3．学会等名 日本ヘーゲル学会第30回研究大会 シンポジウム「カテゴリー論としてのヘーゲル論理学 ―その歴史的的位置づけと射程について―」（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 増山浩人
2．発表標題 バウムガルテンとカントのア・プリオリな神の存在証明
3．学会等名 科学研究費：基盤研究C「《経験的改訂を容れる「ア・プリオリ」概念》を用いたカント的超越論哲学の組み換え」公開講演会（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 増山浩人
２．発表標題 カントのバウムガルテン形而上学との対決　―「超自然学」としての形而上学の復権―
３．学会等名 日本哲学会第77回神戸大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 陶久明日香、長綱啓典、渡辺和典（編）（増山は113-127頁を担当）	４．発行年 2022年
２．出版社 工作舎	５．総ページ数 454
３．書名 モナドから現存在へ――酒井潔教授退職記念献呈論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本ライプニッツ協会第7回研究奨励賞受賞

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関